

第6回「都立文化施設のあり方検討会」議事概要

1. 日 時：平成19年3月8日（木）午前10時から正午まで
2. 場 所：都庁第一本庁舎33階北側 特別会議室N6
3. 出席者：福原委員
浅津委員
草加委員
小林委員
原委員
福地委員
今村委員
杉谷委員
井関東京都庭園美術館館長
4. 次第
意見交換「テーマ：東京都庭園美術館の役割・機能及びその他都立文化施設の今後のあり方について」
5. 主な発言
 - 東京都庭園美術館は、旧浅香宮邸である本館に由緒があり、庭園も素晴らしく、他にはない特別な美術館である。
 - 東京都庭園美術館は、ゆったりとした空間で一日を過ごすことができるような施設であって欲しい。
 - 建物にふさわしい展覧会を行って欲しい。
 - 東京都庭園美術館は、東京都美術館等のように列を成して入場する性質の文化施設ではなく、ゆったりとした憩える雰囲気を大切にしたい。
 - いつ行っても鑑賞できる何かがあればもっと魅力的になるだろう。
 - 「伝統的・歴史的な文化財の保護」と「新しい価値の創造」の2つが、東京都庭園美術館に与えられる使命ではないだろうか。
 - 文化財である本館は、竣工当時の姿に戻す方向で手を入れ、建物や内装などを傷つけないようにすべきである。
 - 建物を生かすためにも、朝香宮オリジナルの調度品あるいは同時代の工芸品を、美術館の基本となる常設展示にすればよい。
 - 新館は積極的に保存するほど価値は無く、予算的に大差が無いのであれば建替えが良い。
 - 新館は、展示スペースとホールの機能を中心とし、ニーズに応じて他機能を考えるべきだろう。
 - 庭園は、小中学生を対象としたお茶の実践、体験ができる教育施設として茶室を活用することによって、生きてくる。
 - 東京都は、施設改修や建設のための予算と同じように文化施設運営の予算を重視し、長期的な文化プロジェクトなどの予算確保を考えなければならない。
 - 東京都庭園美術館は、もともと美術館として建てられたものではないので、美術館としての設備が不十分であり、これを補う必要がある。
 - 本館は、企画展への導入に使い、主な展示スペースとしての新館に人を誘導する役割が良いだろう。新館は本館を補完するべく、美術館機能を充実させ、建替えが好ましい。
 - 東京都庭園美術館は、展示物によって空間の雰囲気が変化する良さを持っている。

- 庭に対しては、もっと手入れを行き届かせるための予算措置が必要である。庭師は芸術家に近い面もあるので、入札制度で良いものか考えなければならない。
- 大規模の美術館と異なり、気軽に行くことができ疲れない。そのような場が持つ磁力を活用する方法を考える必要がある。
- 美術館的スペースの拡大を検討するには、事務局のマンパワーが十分かを考えて選択するのも手である。
- 新館を建替えるとして、事業を行うことを考慮すれば 500 m²では狭い。
- 耐震性に不安がある建物には美術品は置けないので、耐震性については留意すべき。
- 東京都庭園美術館をどうするかは、歴史的な価値をどう読み直すかにかかっている。
- 新館の改修・建替えについては、予算、規模、用途をよく考えなければならない。
- 東京都庭園美術館は、シルバー人材を利用してホスピタリティーのレベルがとても高く、美術館の付加価値につながっている。
- 地域コミュニティ、NPOなどの中に、庭園管理のパートナーを見つけられる可能性がある。
- 新館は、本館とは異なり美しい施設ではないが現状、庭園からの風景を決定的に邪魔しているものではない。本館で不足する美術館的機能を補完する担い手として必要である。
- 旧岩崎邸庭園では、美術品は展示せず立派な建物と庭園を公開している。それでも価値がある。
- 新しい建物ができるのであれば、そちらで企画展を行い、現在の本館は、中を見てもらえるような展示の方法を考えてはどうか。
- 建物の歴史的な価値を説明する学芸員がいれば、古い建物も生きてくる。
- 本館の歴史的な意義を的確に認識し、それを受け継ぐべきである。
- 日本の建築家は、古い建物にモダンな建物を加える技術がとても高い。
- 新館の建替えにあたっては、新しい価値の創造ということも考えるべきである。
- 文化施設の役割は、文化のストックを作ることであり、それを作るためには、創造事業を行わなくてはならない。
- 文化のストック作りをだれが担うべきかは重要な課題である。
- 文化施策は長期的な視点が必要であるが、指定管理者制度では短期的な取組みになってしまい文化を育てにくい。
- なぜ自治体が文化に取り組むかを、原点に立ち返って考えるべきである。
- 文化施設の管理者は、利用者に対して「管理」ではなく「サポートする」意識が必要である。
- 東京都の職員は、文化施設の運営の特殊性を的確に認識した上で政策に当たって欲しい。
- 東京都が所管する文化施設は、個々にどれもが立派である。しかし、それらがつながらなければ効果を十分に発揮できない。
- 東京都は首都の行政責任者として、文化行政の位置づけをどのように考えているかを問われている。
- 芸術文化鑑賞へのニーズは、高齢者だけが高いのではなく、若者のニーズも高い。
- 新しい体験や発見を提供することも、文化施設の大きな使命である。
- ネット社会になっても、リアルな面が意味を持つ時代が来ており、その点で、文化施設は社会をつくる上での重要な意味を持つ。
- 東京都が文化施設にミッションを与えていないために、文化の発信基地という都市の持つ魅力が東京では弱い。
- トーキョーワンダーサイト、東京都写真美術館や東京都江戸東京博物館は、ミッションがはっきりしている感じがするが、東京都庭園美術館はその点であいまいに感じる。

- 東京都庭園美術館には、デザイン、建築、工芸や服飾をテーマに発信させることがふさわしい。
- 東京都は文化施設の運営人材を育てることに注力しないと文化の発信はできない。
- 行政は、民間では出来ないことをすべきである。しかし、文化に関しては、民間が非常に沢山の部分を担っていることを認識し、民間を支援するという視点も必要である。
- 人を呼び込むためには、まず地域コミュニティーの人たちが喜ぶことをしなければならない。対外発信力について考えるに際しては、こうした点が重要である。